



千葉港の発祥

千葉港の発祥は遠く鎌倉時代に遡り、都川河口付近に寒川港と呼ばれる原始的船着場がありました。この船着場が千葉港発祥の地といわれています。

江戸時代末期には、江戸、横浜との間に米穀、塩等の海運が盛んでありましたが、明治6年(1873年)に千葉県が誕生し、舟運の中心である市場町に県庁が置かれたため、港周辺は政治、交通の中心として栄えるに至りました。

明治43年(1910年)には、民間資本により11ヘクタールの出洲埋立地が造成され、船溜まり(-2m)、荷揚場を整備することにより港湾の始まりとなる形態が整えられ、大正11年(1921年)に内務省告示により港湾指定を受けました。



◆現在の千葉港千葉南部地区～千葉中央地区



昭和2年当時の寒川周辺の様子



寒川港

左図は、寒川港(現在の出洲埠頭付近)の鳥瞰図です。

図中左下には千葉県庁舎があり、すぐ近くを都川が流れています。都川河口には、多くの小舟が係留されていますが、この船溜まりが現在の千葉港の発祥と言われています。船溜まりの上に広がる、海へ突き出した土地が出洲となります。

図中右上の「白旗神社」と書かれている場所が、現在の「白幡神社」です。現在の国道357号より海側はかつては海だったことがよくわかります。図中央、現在のJRが通る位置に鉄道があるのが確認できます。